

子どもたちの居場所となる学級づくりをめざして
— 学級集団・文化活動（主として学級行事）の指導を通して —

目 次

I	テーマ設定理由	41
II	「研究の仮説」	41
III	研究の全体構想図	42
IV	研究の内容	43
1	中学生の状況と発達課題	43
2	学級集団の指導	44
(1)	対話・討議・討論の指導	44
(2)	居場所になる班の編成と指導	47
(3)	リーダーの指導	48
3	学級文化活動の指導	51
(1)	文化について	51
(2)	「遊び」の持つ教育的意義	51
(3)	学級文化活動の課題	52
(4)	学級行事の指導	52
V	検証実践	53
1	事前指導	53
(1)	ヘゲモニーをどうとるか	53
(2)	班長会の指導	53
(3)	取り組みの合意を得る	53
(4)	活動の総括をする	54
(5)	議長の指導	56
2	検証授業	57
(1)	指導案	57
3	考察	60
VI	研究のまとめと今後の課題	60
1	研究のまとめ	60
2	今後の課題	60
3	参考文献	60

子どもたちの居場所となる学級づくりをめざして — 学級集団・文化活動（主として学級行事）の指導を通して —

宜野湾市立嘉数中学校 教諭 当 間 文 信

I テーマ設定の理由

今日、「いじめ・不登校」問題が、大きな社会問題になっている。その陰に隠れて、目立たなくなってるが、「非行・問題行動」も、沈静化しているわけではない。非行・いじめ問題など子どもたちの問題は、子どもたちが主体的に関わり自分自身を安心して表現できる居場所がなくなったからではないか。

「50年代には、どの地域でも子どもたちが群れて遊んでいた。60年代の高度経済成長期になって、屋内遊びに代わり、1973年のオイルショックを境にして地域での遊びがなくなった」と大田昭臣は分析している。

子どもたちは自由な遊びの中で、心を許せる友だちをつくり、人間関係を学んでいく。50年代にはそのような条件が、日本のどの地域にもあった。ところが、その後子どもたちの遊びが地域から消えていってしまい、「友だちをつくり」「人間関係」を学ぶ場は学校だけになってしまった。しかし、学校は基本的には、予め用意された課題を学習する場である。かつての地域のように自由にのびのびとばかりはしてられない。学校は友達と力を競い合う場になっていった。高校進学率の示すように受験競争が激しくなり、将来のよりよい生活を手に入れるために、競争をする場になってしまった。

このような学校の状況で、子どもたちは、丸ごと自分を受け入れてくれる仲間・友だちを求めて苦しんでいるのではないだろうか。特に、自我の芽生える思春期においては、切実な問題である。このような子どもたちの苦悩が典型的に現れたのが、非行や不登校やいじめという現象である。

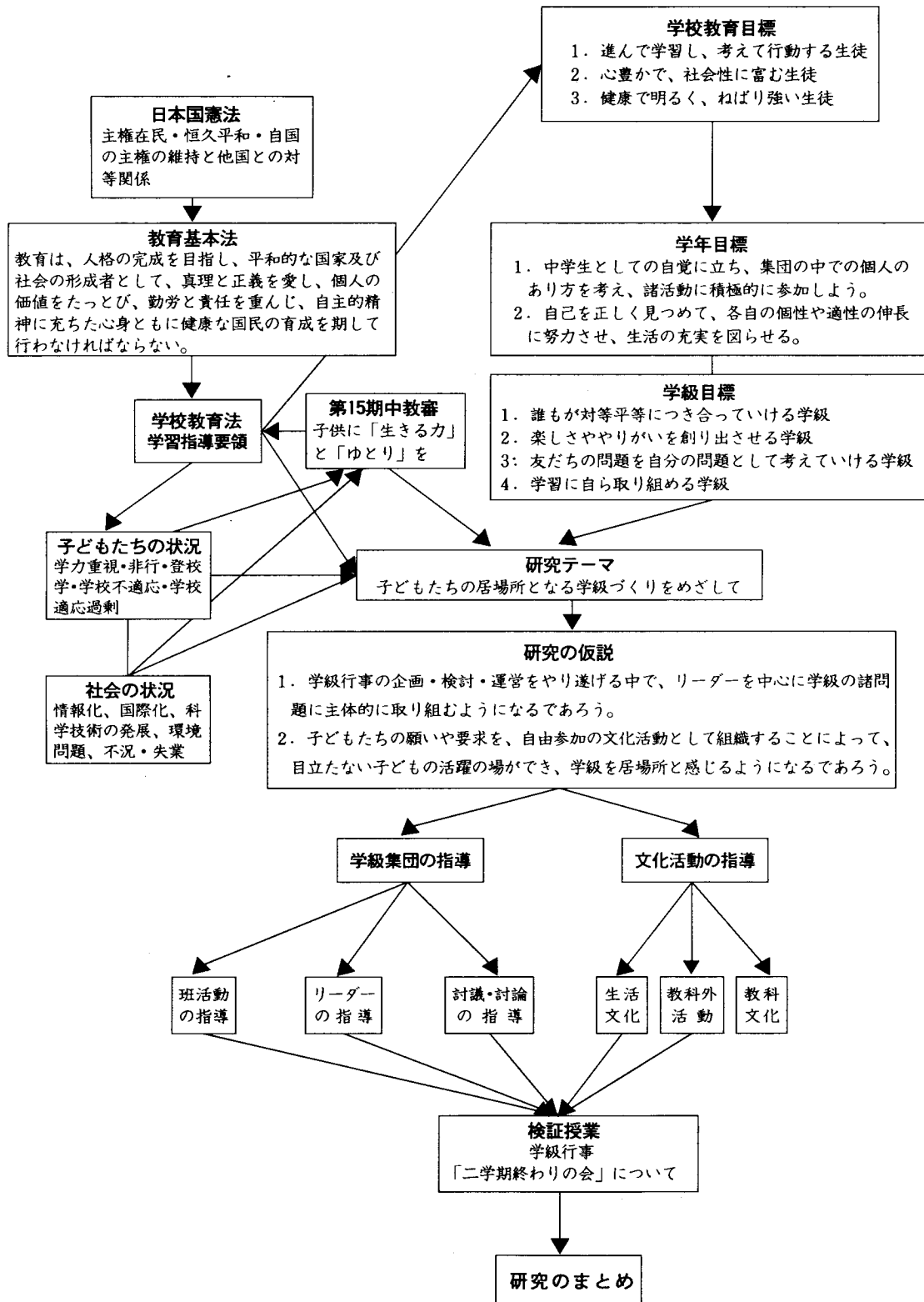
この点で、今回の中教審15期答申で「生きる力」を前面に出して来たことは、大切な観点である。国際化、高齢化が叫ばれている日本においては、様々な人々と交わり社会をつくっていく力が必要である。「健全な生き方の探求、望ましい人間関係の確立」（指導要領、学級活動(2)のア）は、受験勉強だけががんばったって身に付くものではない。

そこで、誰でも対等な人間として生活し、活動する場としての学級づくりについて研究していきたい。学級集団の指導・文化活動の指導の両面から研究していきたい。

II 研究の仮説

- 1、学級行事の企画・検討・運営をやり遂げる中でリーダーを中心に学級の諸問題に主体的に取り組むようになるであろう。
- 2、子どもたちの願いや要求を、文化活動として組織することによって、目立たない子どもたちの活躍の場ができ、学級を居場所と感ずるようになるであろう。

III 研究の全体構想図



Ⅳ 研究の内容

1 中学生の状況と発達課題

「中学校は、70年代前半以来、さまざまな問題行動にさらされてきた。

まず、70年代の前半に、“おちこぼれ”問題の登場と平行して、登校拒否が早くも上昇カーブをゆるやかにかきはじめた。つづいて、70年代後半から80年代の前半にかけて、校内暴力が全国各地で噴出し、非行は戦後第三のピークを記録し、その後も高原状態が続いている。さらに、80年代半ば、それが沈静化し始めたと言われたとたんに、いじめ・迫害が噴き上がり、どこの学校にもいじめがあるといわれるほどの状況が広がり、生徒を死に追いやる事件があいついだ。このように、この20年間、問題行動がつぎつぎと形をかえて噴出してきた。そのなかで、中学生は、学校適応過剰の傾向と、学校からの離脱・離反の傾向を強めてきた。その意味では、中学生問題の本質は、かれらが人格解体の危機にさらされているところにあるといっても過言ではない。」

これは、全生研常任委員会著『新版学級集団づくり中学校編』の記述であるが、現在の中学校の状況を非常に鋭くついているものである。この裏には、高度成長の大きな流れに乗り遅れまいと必死になっている大人の姿がある。高度成長は、第一次産業から、第二次・第三次産業への国家的な転換であった。農業離職者がふえ、農村からの出稼ぎが増大し、中学卒業の若者は「金の卵」と歓迎されて工場労働者となっていった。

それは、国民の側からすると、土地と地域の長い伝統文化に根ざした生活から、能力による利潤追求の生活への転換であった。これまでの、地域の伝統文化に根ざした価値観から、能力によって、人生を切り開いていく価値観への転換であった。つまり、頼れるものは、能力であり、その象徴が学力・学歴である。そして、わが子の幸せを願って「いい高校」「いい大学」へ進めようと、学力・受験競争に拍車をかけてきたのである。それは、進学率に現れている。(1950年42.5%、1960年57.7%、1974年90.8%、1996年96.7%)

ここで、大きな問題は、これまで親が土地と地域の長い伝統文化の支えを失ったということである。受験学力をつけることに対置できる価値観を提起できなくなったということである。

このように日本全体で大きな価値観の転換が進んだ中に、1972年沖縄は祖国復帰し、日本の大きな流れの中に入っていったのである。ちなみに、1995年度の高校進学率は、沖縄は最下位ではあるが、91.8%である。この数値が意味するものは、何だろうか。現在の沖縄が、本土並になったこと、伝統的な価値観が失われたことを意味するものではないか。

ここに、今日の問題状況の根本的な原因があると考ええる。人は人と人との関係の中で育つのである。どんなに、自由になってもものが豊かに手に入るといっても、一人では生きていけない。子どもたちも一人きりでは、自立できない。無制限に情報のあふれる現代社会の中を、何の手がかりもなくさまよっていくことになる。必要なことは、いまの社会を生き抜くための人間関係の創造、人間らしく生きていくための価値観の創造だろう。

小学校低学年の腕白坊主はかわいい。勉強なんかほっぽらかして、日暮れるまでどろん

こになって遊び回る、それは、子どもも自然な姿である。50年代は、そのような子どもたちが、ごくふつうに見られた。そんな遊びの中で、子どもたちは、自分たちの仲間づくりをし、社会や大人に対する見かたを鍛えてきた。

しかし、現在はどうかだろうか。小学校の腕白坊主は、そのまま放っておくと非行に走って際限なく荒れていく。中学生になって、自分を丸ごとぶつけてつき合いたい欲求に駆られて、突き進んでいくと、そこには、非行グループしかない。なぜ、かつてのようにごく自然に、自分を丸ごとぶつけて生きていくことができなくなったのか。それは、受験学力による単一的な価値観が小学校から子どもたちの中に染み渡っているからと、思わずにはいけない。いま、子どもたちが必要としているものは、洗練された文化や学力ではなく、彼らが丸ごとぶつかっていける場である。友だちとさまざまな活動を協働し、試行錯誤しながら、自分自身の世界観をつくっていく場である。

「思春期の子どもは、①おとなへの反抗をつうじての心理的離乳、②同性・異性の友だちとの交わり、③自治的集団の形成、④自己教育・自己訓練、⑤親子関係の再構築などをつうじて、人格的な自立へ旅立っていくのである。」（前掲書P22）

折出健二は、子どもの自立について、次の四点を指摘している。

「第一に、衝動や欲望への依存から自立する。感性的な衝動中心の傾向をしだいにのりこえ、自分の意志と思考・判断によって行動できるようになっていくことが、自立の基本的特徴である。第二に、他力依存の行動からの自立ということ。親もふくめたいろいろな個人との社会的交わりの主人となること、人格的な相互依存関係を新しくつくる主体となることなのである。第三に、言語の獲得を基礎として知識・技能・認識を獲得することによる、日常の直接経験からの自立ということがある。第四に、以上の三つの過程と並行して、道徳的に自立するということがある。いつまでも外からの権威による価値規範に従属しているのではなく、みずから価値を判断し、実践化することができるようになることです。」

そして、第15期中央教育審議会第一次答申も「過度の受験競争」「いじめ・登校拒否」の問題状況をふまえて、学校教育のめざすものとして、「生きる力」の育成を基本とすることを打ち出している。（『文部時報』平成8年8月臨時増刊号）

この大きな課題を達成するには、全校的な民主的な集団づくりをしていくことと、毎日の学級のなかに、友との豊かな交流のできる生活文化があることだと思う。学級では、学級集団の指導と文化活動の指導に集約できると思う。

2 学級集団の指導

(1) 対話・討議・討論の指導

子どもたちは、一人ひとり、要求や願いをもって学級にいる。意識するしないに関わらず発達可能態として存在している。要求や願いを実現するためには、自己主張し、他に働きかけて、環境を変えていかなければならない。なぜなら、「人間は環境変革・関係変革を通じて自己を変革する」のであるから。要求・願いを実現する指導が、対話・

討議・討論の指導である。

学級にはさまざまな力関係があり、その中の最も勢力のあるものの力が、暗黙のうちに行為行動を規制している。その暗黙の掟を犯したりするものは、仲間はずしにであったり、いじめにあったりすることになる。あるいは、全体を統一するような規律ができていないために、それぞれのグループの内に閉じこもっていたりする。

教師は、この子どもたちの中にあり、彼らの日常的な行為行動の基準になっている「暗黙の掟を」を「民主的のものにつくりかえなければならない。あるいは、対抗的に、民主的な行為行動の基準（規律）をつくり出していかなければならない。

① 集団のトーン（感情的な調子）の主導権をとる

教師が教育的ヘゲモニーをとれるかどうかは、生徒たちとの出会いをどうつくるかにかかっている。彼らの友だちづくり・グループづくりの過程に直接・間接に介入し、それをリードできるかどうかにかかっている。

第一に、教師と生徒、生徒と生徒が身体ごと出会うことが大事である。だから、教師自身も積極的に遊び・合唱・スポーツに加わり、彼らとともに楽しみ、笑い合うことが重要となる。

第二に、その活動の中で、だれがどのような友だち関係を持っているか、学級のグループ関係がどのようなものかを見通すことである。

第三に、その活動をつうじて、ちぢこまり気味でいじけた集団のトーンやふざけ気味で軽薄な集団のトーンを自由で明るい、前進的なものにすることである。

集団のトーンは、本質的には、集団の感情表現の制度である。だから、これらの活動の指導課題は、否定的な集団のトーン、つまり、自由な感情表現を抑圧する集団の陰湿な情緒構造をのりこえて、自由で明るい、真剣で意欲的な、前進的で活動的なトーンをつくり出すことにある。

子どもたちの要求や願いを実現させるための指導は、大きく二つに分けられる。ひとつは、非行・問題行動などのような突発的な事件であり、もう一つは、意図的・計画的な取り組み（学級活動の総括案、活動方針案）である。

② 突発事件の指導

非行・問題行動などにからむ突発的な事件は、他の生徒たちの権利侵害を含むものでもあるが、同時に彼らの要求の無意識的な表出でもある。彼らはそれをつうじて何かを発題し、発議しているのである。だから、それを彼らだけの特別な問題として片づけないことである。これを学級の自治の問題として取り組むことは、新たな学級規律の確立であり、彼らに対して学級との関わりを認識させることになる。ア、事件を学級の問題として提示し、それを生徒とともに解説していく。

イ、とりわけ、事件関係者がそれをつうじて何を学級に発題・発議しているのかを解説していく。

③ 話題化と議題化・・・力の問題を「知」の問題に転化する

教師は、学級の現実を問題化し、それに対する方針を提起することが課題である。

生徒たちの無意識に訴えていることを、原案にまとめて、それを学級に提出していかなければならない。または、討論資料とともに、提起しなければならない。

しかし、いきなり、学級全体の討議や討論に入ることは、現状を支持する勢力の大きな反発をかうことになる。なぜなら、教師の問題提起は、学級の非民主的な力関係やイデオロギー関係を明らかにするものだからだ。それは、すでに、力を持っている勢力を立ち上がらせることになる。一方、立ち上がって欲しい子どもたちには、まだ、共通認識と連帯がつくられていないから、立ち上がれないし、発言力もない。そこで、

第一に、当事者に最も近い生徒やリーダーに接近し、問題を投げかけ、それについての対話・話し合いを持つ。

第二に、個人ノート・班ノートをつうじて意見交換を組織していく。

第三は、学級通信・学級新聞を通じて学級の世論と合意を形成していく。

第四に、朝の会・帰りの会をつうじて、世論・合意を学級討論・学級討議へと煮詰めていく。

以上のような指導を通して、子どもたちの中にある権力的な「強い」「弱い」の力関係で差別する、上下関係の価値基準を民主的な価値基準に転換させるのである。

だれが良いか悪いかと論議すると、勢力争いになる。そんな力関係から切り放して、問題そのものを扱うのである。「何が問題か」「どう問題か」「どうすべきか」と、知的な問題として明らかにしていくことによって、「正しさ」を導きだすことである。そして、その合意を得た「正しさ」が、民主的な行為行動の基準（規律）となるのである。

④ 学級会の原案づくり

前述の、「力」の問題を「知」の問題に転化していくという見通しのもとに、学級会の指導も構想していく。さもないと、教師の鋭い指摘は、陰に陽に力ある子どもたちの反感を生み出していくことになる。

学級会は、学級集団が問題状況の分析と評価をつうじて、学級の課題を設定し、その解決のため活動方針を決定すると同時に、その活動を総括していく場である。原案は、いずれは、生徒の指導部である班長会が提出するようになる、しかし、生徒が討議に慣れていない段階では、教師が次のように生徒の発議や、自分自身の発議を原案にまとめて提案する。

I 学級はいま何を目的としなければならないか。（情勢分析と集団の課題）

- ① 学級分析（学級のようすや学級活動の総括）
- ② 活動のねらい（学級の課題とそれにたいする指導方針）

II どのような活動をどう展開するか（活動方針）

- ① 活動目標（どのような活動に取り組むか）
- ② 活動計画（活動日程と到達日程）
- ③ 活動形態と活動組織（参加形態と役割分担）

⑤ 討議の指導案をつくる

学級会の教育的な意味は、討議・討論を通して、民主的な判断能力と、民主的な行動能力を身につけさせることである。そのためには、能動的に学級会に参加する状況をつくることである。賛成するにしても、反対するにしても、受け身でそれらを受け入れるのではなく、自分の立場を明確にして関わっていけるようにすることである。

ア、原案を議題として採択することに同意する発言を組織する。

イ、学級のようにすを際立たせる発言を組織する。

ウ、社会的弱者や絶対少数者の権利を擁護する。

エ、条件つき賛成・条件つき反対という意見の出し方を教える。

(2) 生徒の居場所になる班の編成と指導

地域で自由に友だちと遊び、交流する機会のなくなった現代の子どもたちにとって、学級は大事な交友の場である。しかし、不登校・登校拒否の生徒に代表されるように、友だちと交わる能力、集団の中で生活する力の弱い生徒が多くなっている。それは、一見素直で、真面目で何の問題もないように見える生徒の中にもある問題点である。素直で、真面目そうな生徒の中には、全て校則的な見方で判断し、自分自身の考えを持つとしない学校適応過剰な生徒が出てきているのである。学校・学級の中で全面的に自分の自我を出してつき合っているのではなく、自我を出すのが不安で、学校のきまりに素直に従っている子どももいるのである。このような子どもたちの安心できる居場所づくりの第一歩が、班の編成と指導である。

① 班編成の呼びかけのポイント

ア、班は、一人一人の生徒の居場所であり、自立の根拠地である。

イ、班は、友情・連帯をとりむすび、発展させていくための集団である。

ウ、班は、学級的意思決定をおこなう討議・討論のための基礎的な集団であり、一人ひとりの生徒が学級の生活と自治に参加していく拠点である。

② 班編成の方法

<教師による方法>

ア、教師が意図的に班を編成する方法

イ、教師が無作為に班を編成する方法

<主として生徒が班を編成する方法>

ア、リーダー的な生徒と教師とが競い合って班を編成する方法・・・「好きなもの同士による班編成」・・・班に入れない者について班長と論争する。

イ、クジやジャンケンで班を編成する方法・・・「なれ合い壊し」

ウ、班長による班編成・・・リーダーが教師の指導・助言を受けて班を編成する

以上のような班編成の方法が考えられるが、いずれの場合でも、その時々学級の課題や特定の子どもたちの課題などを考慮して、指導を工夫することが大事である。

(3) リーダーの指導

教師の指示なしに、自分から学級づくりに乗り出してくるようなリーダーが出てきたとき、学級は自治的集団へと変わっていく。では、そのようなリーダーを育てるすじ道はどのようなのだろうか。通常、班長の指導を通して育てていく。

① 班長を班内で選出させる

最初の編成では、次の点をおさえる。

ア、班長は班内互選によって選ぶ。ただし、立候補するものがあれば、まず彼を信任するかどうから班長選出をはじめる。班長二人制(男女各1人)からはじめる。

イ、班長になるものに最も求められることは、やる気であって、力ではない。班長としてどうすればよいかは、教師が教える。

ウ、任期中における学級の課題の一つである行事について話し、それに意欲をもつものに立候補するように呼びかける。

エ、班員は班長を選出した限りにおいて、班長を支持し、班長に従うことを原則とする。ただし、班長が班と班員の利益に反することをおこなう場合は、班員は班長を批判し、必要に応じて解任することができる。

② 班長立候補制の導入

班替えの際に、これまでの班と班長と班長会を総括しながら、次の班長の選出を見通していく。そして、それなりの条件をつくり出し、班長の立候補制を導入していく。

③ リーダーに対する個別的接近

学級のスタートの段階では、力のあるリーダーは、班長などというわずらわしい任務を持つものは、やりたがらなのが普通である。だから、班長たちだけを見ていたのでは、教師の指導は、学級の上面だけをなでているのようなもので、子どもの実態に絡まないものになってしまう。そこで、どうしても必要なものが、リーダーに対する個別的接近である。

④ 班長の仕事

班長という役割をつくったのは教師だから、教師は指導の見通しを持たなければならない。班長の仕事には、大別して二つの面がある。A集団内のリーダーシップとB集団間のリーダーシップである。それぞれについて、彼らの個性と力量、彼らの班の現実に見合った形で教えなければならない。

⑤ 班長の指導

班長たちは、最初から目標と自覚を持って出て来たのではない。むしろ選ばれてしかたなく引き受けた班長の方が多い。彼らが感じているのは、班長という重さと不安である。だから、教師は指示・評価・対話をつうじて、班長の仕事を一つひとつ教えながら、まず、班長としての自信と自覚を与えてやらなければならない。

ア、自分が理解できたことを自分の言葉で表現する。(言いかえ)

イ、自分が理解できないことは必ず質問する。(質問)

ウ、自分にできそうもないこと、やりたくないことは拒否する。(拒否)

エ、予測される困難にたしする援助を要請する。(援助要請)

オ、教師の指示に対して、自分の意見をつけ加える。(補足意見)

カ、教師の指示に対して、一部の修正を求める。(修正意見)

キ、自分の提案があるときは、それを主張する。(発議)

ク、自分の判断と行動で問題に対処することを教師に宣言する。(自立宣言)

指導を受けるというのは、教師に従うことではなく、教師の指導の中にある真理・真実に従うのだということを、集団全体に教えていく必要がある。そして、正しいことに自発的に従うのがリーダーなのだということを教えていくのである。つまり、教師の指示と評価によって励まされていた班長たちが、自分の判断で取り組むようになることを見通して指導するのである。

⑥ 班長会の指導

各班の代表の集まりであり、学級の指導部である。しかし、最初の段階は、リーダーとしての意識や自覚のない班長がほとんどだから、討議や討論するほどの共通の土俵ができていない。だから、まずは、班長としての仕事の指示と点検と評価の場である。それを、班長集団の中でやっていくと、班長としての学習・援助の場になる。これを短時間でやり、数多くやる中で、班長会という共通の土俵ができてくる。そこで、学級の指導部としての班長会の任務が登場する。それは、＜A学級諸活動の総括案＞と＜B活動方針案＞の作成検討である。

＜A学級諸活動の総括案＞

学級の出来事をただ受け身で眺めているだけでは、その時々で気分で一喜一憂して、やがて消え去ってしまう。その中から価値ある出来事を取り出し、その価値を集団的に検討し、認識していくのが総括である。この共通認識を作っていくことが、子どもたちの社会製作である。次のような点に注意して指導していく。

ア、学級の達成目標が実現されたかどうかを各班ごとに点検評価し、班長たちが競争しつつ、協力してそれに取り組むように指導していく。

イ、教師の評価に対して細く・修正を求める班長の発言を積極的に取りあげ、それをめぐる班長会の討論を組織する。重要な補足・修正を求める班長には、それを学級討議で提出させるようにする。

ウ、班長会で結論を出すのではなく、班長会の討議を学級会に持ち込んでいくように指導する。そうすれば、それは総会討議の予備討論という性格をもつようになる。

エ、班長たちが統一して教師原案に修正を求めるときは、学級討議において修正意見を提出させるようにする。

このように、総括案を作成していく過程は、自分たちの生活をリアルにとらえ、価値あるものを見つけだし、価値ある自分たちの共同世界をつくり出していく過程である。

< B 活動方針案 >

学級全体の活動方針案というのは、現状を変えていくものである。すると、当然、現状肯定派、現状で力を持つ勢力との何らかの対立が生じる。原案作成者はそのことを念頭に置いて作らなければならない。だから、最初の段階ではそれができるのは、教師しかいない。したがって、班長会討論では、「班長会提案にすること」を決定するのではなく、「学級会の議題にすること」を決定するのである。

◎まず、学級の状況分析から行う。

ア、学級はいまどのような状況にあるのか。

イ、状況を変えていくためには、学級は何をいま中心的な課題とするべきか。

ウ、原案は集団の状況認識・課題意識を高める案として討議に値するか。

これらの点について大筋の合意が成立したとき、班長会はこれを議題として採択し、採択しない場合は、差し戻す。

◎次の点に注意して班長会討論を組織していく。

ア、原案を班に引きつけて理解するように指導する。(5W1Hに着眼させて)

イ、異議のある場合は、修正案を出させ、予備討議を組織する。ただし、発議者または原案作成者は、自分の責任において原案を学級会に提案する。

ウ、細部の班の活動のしかたを班に委ねるような原案(係りなど)の場合は、教師はその例をあげ、班長たちが競って独創的な方針を立てるように指導する。これが、班長による原案作成の始まりになる。

エ、発議者およびその賛同者である班長に原案の一部分を作成させ、原案づくりを教えていく。

オ、発議者である班長が教師に代わって原案を提案するとき、また班長会が統一して教師原案にたいして修正案を出すとき、提案と討議のためのワークショップを開き、質疑応答・討議の練習をさせる。このような指導の積み上げによって、班長会を実質的な学級の指導部に育てていく。

⑦ リーダーサークル

公的な組織ができると、それに付随して、ある特別なことに関心を持つようなグループができる。班長会の中で生まれるこのような私的なグループは、学級の最も先進的な部分である。この先進的な部分をリーダーサークルとして、引き出していくことは、「リーダーへの個別的な接近」と同様に重要なことである。彼らとおしゃべりしながら、彼らの日常的な感覚のレベルで付き合い、彼らの関心を、社会問題、世界情勢、科学、文化と広げていくことが、班長会を豊かな質の高いものにしていく。しかし、これは、教師の世界観・人間観の間われるところである。日々の意識的な生活の創造が求められていると言えよう。

以上のように、学級集団の指導は、「願いや要求を実現するための討議・討論の指導」「生徒の居場所になる班の指導」「リーダーの指導」の三つの側面を視野に入れていかなければならない。

3 学級文化活動の指導

(1) 文化について

『大辞林』によると「文化」とは、次の通りである。

「①社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体。言語・習俗・道徳・宗教、種々の制度など。それぞれの人間集団は個別の文化をもち、個別文化はそれぞれ独自の価値をもっていて、その間に高低・優劣の差はない。カルチャー。②学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神的活動から生み出されたもの。③世の中が開け進み、生活が快適で便利になること。文明開化。④他の語の上に付いて、ハイカラ・便利・新式などの意を表す。」

現在、「文化」というと、②や③の意味で用いられるのが普通である。しかし、文化の最も根本的で大事な部分というのは、①にある。かつての農業社会から、企業社会へと変貌した今日、「構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式」としての地域社会の伝統的な文化はなくなった。

現代人の課題は、かつて地域社会に密着し、長い歴史的な伝統文化に忠実な生き方から、自立した個人として、集団的に共有できる文化を再創造する生き方への転換だろう。

(2) 「遊び」の持つ教育的意義

学校文化は、大きく教科指導、教科外活動、生活文化の三つの領域に分けられる。この全体を見通して文化活動の指導を考えていかなければならないだろう。しかし、非行・不登校・いじめなどのような、学校文化不適応、学級文化拒否の状況があることを考えると、重要なことは、文化の「質の高い、低い」よりも前に、子どもたちを文化の創造主体にすることである。この意味で、原初的な文化獲得の手段である「遊び」の意義を見直しておく必要がある。「遊び」の研究家の森林氏は、「遊びの特性」を次のように定義している。

「①遊びは自由な活動である。②遊びは自発的な活動である。③遊びは自己目的的活動である。④遊びは、喜び、楽しさ、緊張感を伴う活動である。自由であり自発的であるということは、自主的な主体性のある活動でもあることを意味している。さらに、受動的でも画一的でもない、創造的な個性ある活動が遊びである」この「自由であり自発的で」あり、「自主的な主体性のある活動」こそ、「生きる力」の源である。学級の文化活動の中にこの遊びの精神を生かしていくことが、緊迫した受験体制の中で、自分に閉じこもっている子どもたち、反目しあっている子どもたち、自暴自棄になって荒れていく子どもたちを結びつける力になるものだと思う。

(3) 学級文化活動の課題

子どもを創造主体にするといっても、何でも子どもたちの言うとおりにやるというのではない。文化活動実践の最大の課題は、生徒の文化的要求と、教師の要求とをどう合意するかである。次の二つの面からの追求が必要である。

一つは、文化の質の問題である。何を指標として子どもの文化要求を発展させるかと

いうことである。

ア、子どもの理想をはぐくむこと。

イ、集団の課題解決に役立つこと。

ウ、子どもを発達させること。

エ、教科・教科外と環流し合うこと。

オ、子どもの期待する感情に添うこと。

以上のの点に留意しながら進めることである。しかし、常に子どもの文化的要求を待つのではなく、子どもの要求に先んじて、新しい文化の扉を開き、その世界に誘うという、文化の先達としての役割も自覚しなければならないだろう。

二つ目は、文化の民主性の問題である。マスコミ文化の孤独な消費者の位置から、文化創造の主体にしていくことである。いくつかの方法が考えられる。状況に合わせて、選択し、工夫していく必要がある。

ア、まず、教師の強いヘゲモニーをもって活動を進める。教師の「やるき」に引きずられて活動するのだが、なかなか面白い。やってよかった。次は自分たちでやってみよう。という発展を見通していく方法。

イ、希望参加とし、一応、学級全員への承認を経て進める方法。希望者でやりだしながら、しだいに参加者を広げていくのである。

ウ、自発的にやりたいものがやりだし、しだいに参加者を広げていく方法。

(4) 学級行事の指導

学級の指導は、「学級びらき」に始まり、「学級じまい」に終わる。この二つの行事には含まれた全過程が学級づくりである。どんな行事があるか見てみよう。

ア、学年の始まり・終わりの「学級びらき」や「学期初めの会」「学期終わりの会」のような節目の行事。

イ、学級成員の進退・慶弔に関する行事。「誕生会」「全快祝い」「祝賀会」「送別会」「迎える会」など。

ウ、日常的な取り組みを総括する行事。「学級目標達成を祝う会」「班替え」など。

エ、学級の文化活動の集中的・総括的な行事。「集団遊びの会」「班対抗合唱コンクール」など。

オ、教科指導から発する行事。「漢字書取大会」「意見発表会」など。こう見ていくと、ふだん何気なく見逃していることが、学級行事として位置づいていることが分かる。

これを意識的に取り組むことによって、学級に文化活動を導入し、学級文化をつくる力にすることができるだろう。

V 検証実践

1 事前指導

(1) ヘゲモニーをどうとるか

学校現場を離れていて、学級での生活を共にしていないことは、教師としてヘゲモニーをとれるかどうか心配であった。子どもたちは後任の教師とともに、学級づくりの再構成をしていたのである。音楽発表会、修学旅行という大きな行事をこなしてきており、学級には、新たなトーンができていた。私は、もう「よそ者」である。私は、よそ者としての自分の立場を意識しながら、実践をどう展開するか。教師としてのヘゲモニーをどうとるか考えた。その立脚点を「①自分たちの活動を総括する力をつける。②生活を楽しむ文化活動を導入する。」の二点に置いた。後任の教師からいろいろと状況を聞いて、通信を発行し、アンケートをとった。

(2) 班長会の指導

ある程度予想はしていたけど、子どもたちの反応の悪さに愕然となった。「二学期終わりの会」賛成者が13名で、次に多かったのが、「やらない方がいい」の10名であった。特にM子のことばにはぐさっと来るものがあった。「先生がいたときよりみんな落ちついています。もう、ようす見になんか来ないで下さい。」とあった。子どもたちは、もうすでに後任の先生との生活を創っているのである。わたしの出番はなくなっている。腹を据えて、本当に子どもたちのためになる行事を創らなければならない、と決心した。

しかし、このような事は、実践場面ではよくぶつかることでもある。この状況をどう開くかは、大きな実践的課題である。これを技術的に解決できれば、かえって収穫は大きいといえるのではないだろうか。私は、そう思い直して、「私に従わせるのではなく、正しい指導に従わせる」ことを再認識した。

班編成や班長選出などの組織的な指導はできないので、まずは、修学旅行の班の班長たちを集めた。集中した会にするために、「視聴覚室」「相談室」を利用した。時間帯は、休憩時間か放課後である。

(3) 取り組みの合意を得る・・・第1回班長会

12/9(月) (時 1:25~1:45 場所 視聴覚室)

1班のK班長以外全員参加していた。R子とN子が希望して参加していた。視聴覚室に入って、てんでんばらばらに座っていた。「よし、ちゃんと座った人には、チョコレートあげよう」と、ポケットから取り出すと、とたんに寄ってきた。話は、次のように、聞いてもらいたいことを、一つ一つ、掲示しながら、進めた。

◎『二学期まとめの会をやる』理由と目的

⇒1、研究授業がある。

2、生徒が自分たちで色々な活動ができるようにする。

「研究授業があることは先生も知らなくて、“みんなと別れたのにどのような顔して会えばいいのだ”と、困った。しかし、これが条件だと言うのだから、やむを得ない。そこで、どうせやるのなら、自分たちでいろいろな活動ができるようにしよう」と話しどうにか合意を得た。

「二学期まとめの会の目玉になるものを、挙げてみよう」と、呼びかけて、「球技大会」「クリスマス会」「カラオケ大会」など、けっこう反応が返ってきた。

じっくり検討する、真剣な会議とはほど遠いものであったが、私の意図を受けとめてくれたことに、まず、ひと安心した。翌日には、学級に何らかの影響を及ぼしていくだろうことを期待した。

(4) 活動の総括をする・・・原案づくり

子どもたちは、無意識のうちに抑えていたものを、担任の交代に際して、全面的に開放したようであった。いろいろと問題状況が出ていたようであった。学級の歩みを見つめなおし、そこから価値あることを確認しあっていくことが、今後の活動の原動力になると判断した。後任の教師から予め情報を仕入れて、素案をつくって班長会にのぞんだ。大項目だけを短冊にして張り出した。話し合いはそう活発ではなかったが、自分たちの二学期の歩みを確認していった。N子が原案作成を引き受けてくれた。彼女は仲良しのT子と一緒に作業する予定だったが、T子が嫌がったため、困っていた。私は、彼女と同じバンド部のしっかり者のY子、S子の二人にお願いして、手伝ってもらった。T子は喜んでやってきた。

「二学期まとめの会」

提案 班長会 12/18

一、二学期の歩み

1、当間先生が研究所に去った。

何か心棒が抜けたみたいで、面白くない雰囲気が学級に広がった。「三組は最低！」と叫び出す人もいた。

2、みゆき先生の登場

そんな中に、みゆき先生がきた。事情をよく知らないみゆき先生に対して、わがままな気分をそのままにぶつけた人が大勢いた。しかし、みゆき先生は、生徒と同じ立場に立って、学級の問題・一人一人の問題を考えて下さいました。最も印象的な出来事は、美術の時間に、だらだらして随分遅刻して、美術の先生をかんかん怒らせたときに、先生も一緒になって泣いて謝ったことでした。

3、行事でのみんなの活躍

(1) 中頭地区陸上

中頭地区陸上で、嘉数中学校の華々しい活躍がありました。なんと嘉数中学校史上初めて、総合優勝したのです。そして、その中で、仲村斉と野村尚貴の二人がリレーの選手として、そして陸上部で熱心に練習をしている金城由奈さんがリレーとハードルに出場し頑張りました。

(2) 音楽発表会

そして、音楽発表会、最初は、不真面目でなかなかちゃんと練習しなかった男生徒がびっくりするような大きな声で歌いました。一学期末「学校には行かん」と宣言して、長いこと学校を休んだF君が歌詞をちゃんと覚えて、当日しっかり歌った。「家の子がこんなに喜んだのは見たことがない」とお母さんも喜んでいました。彼がこんなに喜んで頑張れたのは、みんなの気持ちが通じあっていたからだと思います。学級全体が「いい合唱をつくろう」と、協力し合えたからだと思います。残念ながら、入賞を逃してしまいましたが、男生徒が最後になってあのように大きな声で歌えることができたのは、女生徒のおかげです。それは、女生徒が日頃から、しっかりと練習して、しっかり音を取っていたから、最後の男生徒のスパートができたのだと思います。

伴奏者の阿嘉直子、伊是名瞳さんのふたりは、大きな責任を自覚して、しっかりと練習して伴奏をやりとげました。ごくろうさまでした。また、最初は、嫌なことを押しつけてしまったかなと思われましたが、作野義孝君も、指揮を見事にやりとげました。

(3) マーチングの活躍

マーチングの九州大会優勝。渡慶次喜野、阿嘉直子、真栄城沙織の三人がその華々しい、場面に参加した。しかし、全国大会はなんとたったの6秒のオーバーで、評価の対象外になってしまった。残念！

(4) ポニー準優勝

ポニーが県大会で準優勝！仲村斉、池原亮太の活躍があった。しかし、いつも優勝が当然だったから、くやしかったでしょうね。

(5) 修学旅行

一番の楽しみの修学旅行も、みんな参加した。そして、今年の嘉数中学校生との活躍へのご褒美なのか、初日から、九州は雪で歓迎してくれた。みんなは大喜びであった。「何名かが、修学旅行の終わりに、〇〇・・・と不満を言ったときに、亮太が『雪が見れたからいいじゃないか』と言った。」修学旅行の直前に、知花真弓さんが、足を骨折した。彼女は旅行期間中ずっと車いすや松葉杖だった。真弓さんは、とても大変だったと思うが、同じ班のみんなが、カバンを持ったり、松葉杖を持ってあげたりした。階段の登り下りには、濱里好美が自主的に助けてやっていた。旅行期間中、班長さんや各係りの人が頑張りました。頑張りがあったから、楽しく、快適な旅行ができたのだと思います。班長や、係りの長として頑張った人たちは、次の人たちでした。

{班長} 辻邦公、宮城洋平、嵩原優二、山中美汐、國吉香奈子、仲村千夏

{係長} 阿嘉直子 (生活)

4、違いを大事にしよう

この二学期、二年三組は色々な問題にぶつかったけど、大きく成長した。しかし、気になることが、あります。それは、次のようなことが、ときどき起こるからです。

- ① 相手のことを考えずに、人の傷つくようなことを言ってしまうたりすることがある。
- ② 自分の気持ちを素直に伝えきれないことがある。
- ③ 相手のことをきめつけてしまって、相手のことを分かろうとしていないことがある。

自分と違う人のことを、「変なだ」「おかしい」「嫌だ」というふうに、見るのではなくて、「自分と違う」「どうしてかな」「面白い」「つき合ってみよう」というようになってもらいたと思います。

そこで、二学期の二年三組の頑張ったこと・よかったこと、直していきたいことを確認し、三学期は、よりよい学級にしていくんだという決意を込めて、「二学期まとめの会」を開きたいと思います。

二、提案

主な活動内容を次の中から決めていく。まず、ディベートで討論してA、B、C案の長所と短所をはっきりさせて、その後自由討論し、最後に個人一票で決定する。

A案 体育館で球技大会 B案 クリスマス会としてやる

C案 パフォーマンス大会

(5) 議長の指導

組織的な活動になれてなく、学級役員や班長たちがちゃんとしたリーダーに育っていないので、機械的に、役員に任せるわけにはいかない。実質的に学級のリーダーであり、私とは部活動ででのつながりもあるK君を説得することにした。12/14(日)の夕方の6時半ごろ「相談したいことがあるのだけど」と電話すると、母親が取り次いでくれて、学校まで送ってくれた。「K君、先生を助けてちょうだい。頼れるのは、K君しかない。」と、まず、お願いした。T子たちに書いてもらった原案を読み合わせてから、「議長をやってもらいたい」と頼んだ。彼は、柔道の県チャンピオンである。一年の頃から県代表として九州大会に参加しており、私はその引率をしてきた。直接に柔道の指導をしてきたわけではないが、そのようなことも、“恩義”として彼を動かしたのだろうと思われる。彼は、真面目に引き受けてくれた。その後、食事をしながら、学級のようすを話し合った。「先生、I君さえ、何もしなければ大丈夫だよ。」「I君は、ある意味では、素直に自分を表現しているんだよね。だけど、あまりに真剣になりすぎるのかな。ぱしっとムードを斬るから、しらけてしまうんだよね。」「彼を巻き込むようにするといいけどね」「そんなのは、R君がうまいよ」「ようし、K、先生と二人で、ドラマをつくっていいこうぜ」と、話をしめくくった。

2 検証授業

(1) 指導案

学級活動指導案

平成年12月18日（水）5校時

嘉数中学校 2年3組

男子19名 女子20名 計39名

授業者 当 間 文 信

一、題材 「二学期まとめの会」

二、題材設定の理由

音楽発表会・修学旅行など、大きな行事のあった学期であり、子どもたちの成長・変化を総括したいと考えた。学期のまとめとして、自分たちの歩みの中から、成果と課題を見つめることは、子どもたちにとっても大きな意義のあることだと思う。

また、「企画、原案づくり、学級会、行事实施」と学級づくりの全過程を実践的に検証していけると考え「二学期まとめの会」を題材に選んだ。

三、生徒の実態

4月から、毎月誕生会を開催してきた。生まれた月の出来事の紹介や、誕生の生徒への質問合戦など、ちょっとしたことであったが、結構楽しみにしている生徒がいた。学級に文化活動を導入する切り口にしてやってのものだった。しかし、生徒が討議決定するような指導はできなかった。このため、生徒たちが自分たちで企画・運営できるほどにはなっていなかった。

男生徒は、スポーツを得意とする生徒を中心に、10名ぐらいの大きな勢力をつくっており、腕白だが、大らかであり、学級の雰囲気には大きな影響をおよぼしている。男生徒の中には、幼くてすぐに調子になる生徒が、2・3人いるが、逆に、「やらんほうがいい」とすぐに、しらけさせる発言をする生徒もいる。そして、人付き合いのうまくない数人の生徒がいる。

女生徒は、強力な個性派、生真面目ががんばり派、素直でおとなしい派、ちょっと危ない派の四グループにわけられる。反応よく発言するのは、ちょっと危ない派の生徒だが、ちゃんと責任を自覚したものではない。

忙しい二学期の途中から、学級担任を替わったこともあって、「わざわざ学級行事」を持つことに対する生徒の反応は、芳しくなかった。

しかし、原案づくりの中の、二学期の歩みの部分を確認していく中で、班長たちから少しづつ、前向きの姿勢が出てきたところである。

四、指導目標

- 1、自分たちの生活を総括することを教える。
- 2、学級活動の手順を明らかにし、主体的な学級活動ができるようにする。

五、指導内容

- 1、学級行事の持ち方
- 2、学級会の進め方
- 3、総括の仕方

六、指導計画

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1、イメージづくり・・・12/9 | 5、学級会準備・・・流れの確認。12/17 |
| 2、原案づくり・・・12/12 | 6、学級会・・・本時 |
| 3、議長の指導・・・12/13・17 | 7、まとめの会の準備 |
| 4、提案者の指導・12/16・17 | 8、まとめの会 12/21 |

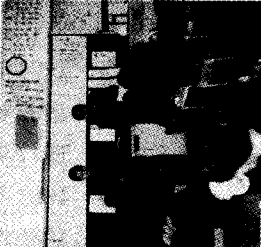
七 本時の指導

(1) 目標

- ① 二学期の歩みを振り返り、その成果を確認する。
- ② 根拠を明らかにして、討論できるようにする。

(2) 展開

時間	会議の流れ	担当者	議 長	生徒の活動	留 意 点
1	一、開会宣言 二、議題の確認 三、提案	議長 議長 提案者	「これから学級会を始めます。」 「今日の議題は、二学期まとめの会についてです。」 「提案者の〇〇さん、提案をお願いします。」	・「二学期の歩み」について、自分たちの体験と比較しながら聞く。	提案者は、ゆっくり、大きな声で、みんなに理解してもらえようように。
8					
2	四、質疑・応答		「今の議案について、質問はありませんか。」 「() 分間班で話し合ってください。」	提案を受けて班会議し、疑問点をまとめて、質問の準備をする。	
	五、討論		「班の話し合いをやめて下さい。」 「質問のある班！」 「〇〇班どうぞ」 「提案者は質問に答えて下さい。」 「他に質問はありませんか。」 「これから討論に移ります。」 「はじめに、立場を決めて、ディベートします。次に、自由討論をして、どうするかを決定します。」		
1	1. ディベート ①立場の確認	議長	「これからディベートに移ります。」 「各班は、自分たちの立場で、発言して下さい。」 「各班の立場の確認をします。」	A案「体育館で球技大会」(2・3班) B班「クリスマス会」(1・6班) C班「パフォーマンス大会」(4・5班) ※各案の支持意見を発表し、黒板に掲示する。	各案について、支持意見を二点しぼらせる。比較しやすいように。
10	②各案の支持意見の発表		「まず、それぞれの提案の支持意見を発表して下さい。」 A (2) 班と (6) 班さんお願いします。 B (3) 班と (4) 班さんお願いします。 C (1) 班と (5) 班さんお願いします。	・他の案の弱点を見つけて反論を準備する。	

11	③他の案への班論 		「これから、討論します。どの班のどの意見について反対するか相談して下さい。」「時間は、2分間です。」 「話し合いをやめてください」「反対意見を発表して下さい。」 「()班さんどうぞ」 「(反対意見を言われた)班さん、班論はありませんか」 「他の班どうぞ!」 「ディベートで、最も発言の多かった班は、()班でした。」 「これにから自由討論に移ります。自分が支持したい提案について、付け足しや、他の提案への反論をしてください。」 「ディベートでは、()案がよさそうでしたが、どうでしょうか。」 意見のある人はどうぞぞ。」 「では、『二学期まとめの会』の目玉をどちらにするか採決します。 いいと思う方に一回だけ手を挙げて下さい。」 「支持数()票で、『二学期まとめの会』の目玉は、()に決定しました。 「最後に先生の話をお願いします。」 「これで学級会を終わります。」	議長	・班で相談して、他の班へ反論していく。誰がどの意見を言うか。 ・自分たちの案に対しては、予め予想される反対意見に対する反論を準備。 個人の立場で自由に討論に参加する。 ・ディベートで出てきた意見も取り入れて、自分の意見をつくる。 ・ディベートや討論で出てきた根拠をもとに判断して、支持する方に挙手する。	・教師は各班を回り発言を促す。 ・特に発言のできない班に援助する。 ・次の自由討論への導入にする。 ・ここでは、教師は静観して、生徒の討論を見守る。		決定をきちんと確認させる ・討論の評価
8	④ディベートの評価 2. 自由討論	議長						
2	六、採決							
1	七、決定事項の確認	議長						
1	八、先生の話 九、閉会宣言	議長						

(3) 評価の観点

- ① 班長たちを中心に二学期の成果を確認することができたか。
- ② 根拠を明らかにして、討論することができたか。

3 考察

まともに「二学期まとめの会」をどうするかと論議すると、自分の立場に固執して、重苦しい雰囲気になって、議論にならないだろうと、ディベートを試みた。「面白くない。やらん！」という発言が出ると、簡単には崩せそうになかったのである。討論にはならなかったけど、三つの案を比較して決定するという、「知的な作業」をさせることはできたと思う。授業後の感想にそれが表れていた。

- ① ディベートがよく理解できたていない生徒が多かった。自分のやりたいことに固執して、ディベートの参加しようとしないう生徒がいた。自分の立場で討論を楽しむのではなく、各班からの意見を聞きながら、どうすれば楽しい「まとめの会」になるかと発展した話をしている班もあった。今後、ゲーム的にディベート使いながら、討論の面白さ、討論の力などを教えられるように工夫していきたい。
- ② 二学期の歩みの総括の部分で、各班からも補足意見など出させるべきであった。書かれていない、出来事や、級友の活躍を補足していくことによって、総括はみんなのものになっていくはずだからである。

VI 研究のまとめと今後の課題

1、研究のまとめ

- ①、社会の状況の変化、中学生の課題について、理論的に追求することができた。
日本社会の大きな歴史の流れの中で、現状をとらえることの重要性を再認識した。
- ②、学級集団の指導については、全国生活指導研究協議会の研究を中心に、体系的に検討しながら、まとめることができた。
- ③、文化活動については、子どもたちの要求や願いを引き出す技を持つことが大事だ。
文化の主人することである。そのためには、個人的にも集団的にもおしゃべりし、対話し討論を楽しんでいくことが大事である。

2、今後の課題

- ①、検証授業は、現場を離れてという特殊な状況の実践であったため、学級集団の継続的な指導の部分を確認することができなかった。今後、意識的に追究したい。
- ②、教師が豊かに文化活動のイメージを持っていることは、子どもたちの要求に柔軟に対応し、それを教育的な内容に切り替えていく力になると思う。この意味で、さらに、先進実践の検討と、身近な生活の中からの文化活動の創造を工夫していきたい。

3、主な参考文献

全生研常任委員会編「新版学級集団づくり入門中学校編」	明治図書	1991年6月
森 稔著「遊びの原理に立つ教育」	黎明書房	1992年3月
家永三郎編「日本の歴史」	ほるぷ出版	1977年11月
全生研常任委員会編「いま、文化活動をどう組織するか」	明治図書	1991年8月
折出健二「人格の自立と集団教育」	明治図書	1986年8月